

高だったが、モリエールをほとんど知らない私にとって、本作は？

ファブリス・ルキーニの怪演に拍手！

映画冒頭モリエール（ロマン・デュリス）が仲間たちと旗揚げした劇団が経営難で破産の危機に瀕する姿が描かれる。この時のモリエールは22歳。日本では破産法によって破産宣告を受けた破産者は十分な保護を受けるが、17世紀のフランスでは債権者たちに訴えられたモリエールは投獄。しかし、金持ちの商人ジュールダン（ファブリス・ルキーニ）が借金を肩代わりしてくれたことによって何とか釈放されたモリエールは、その後一体何を？モリエールの伝記でも空白となっているこの数カ月間にモリエールに何が起こったの？

本作はそんな若き日のモリエールに焦点をあてながら、モリエールの作品に登場するさまざまな人物を登場させたフィクション。若き日のモリエールを演じているのは、フランスのジョニー・デップと呼ばれるロマン・デュリスだ。舞台俳優として朗々とセリフを語るモリエール、劇作家として傑作を書こうと悩むモリエール、ジュールダンの誘いに乗ったものの、とてもこんなバカバカしい屋敷に留まれないと考え逃げ出そうとするモリエール、自分の書いた戯曲をすばらしいと絶賛されたジュールダンの妻エルミール（ラウラ・モランテ）に恋をし、いつの間にか深い仲になっていくモリエール、そんなたくさんの顔をもつモリエールをロマン・デュリスが見事に演じている。

他方、本作でそれ以上に目立つのが、ジュールダン役を演ずるファブリス・ルキーニの怪演。NHK大河ドラマ『龍馬伝』でも41歳の福山雅治はそれなりに魅力的な青年坂本龍馬役を演じているが、それ以上に目立つのが岩崎弥太郎役の香川照之。ちょうどそれと同じような関係だ。本作ではフランスのジョニー・デップもいっい、ファブリス・ルキーニの怪演に注目！

ストーリーの軸は、モリエールよりジュールダン

本作の主人公はあくまでモリエールだが、ストーリーはジュールダンを軸として形成されていく。ストーリーの軸の第1は、商人の（にすぎない）ジュールダンが、社交界の華である侯爵夫人セリメーヌ（リュディヴィーヌ・サニエ）にぞっこん惚れ込んでいること。貧乏貴族のドラント伯爵（エドゥアール・ベール）はこんなジュールダンを利用し、セリメーヌとの仲を取り持つかわりに莫大な金をジュールダンから引き出そうとしていたが、そんなジュールダンとドラント伯爵の思惑の実現は？ストーリーの軸の第2は、すっかりセリメーヌに入れこんでいるため、全く関心を示さない妻のエルミールがモリエールの才能に惚れ込み、結局2人がいい仲になっていくこと。セリメーヌの気を引くため自作の芝居を彼女のサロンで上演するべく、モリエールを演劇の指南役として雇ったジュールダンは、言ってみれば飼犬に手を噛まれてしまったわけだが、そこでみせるジュールダンの反応は？

ストーリーの軸はもう1つある。それはジュールダンの財産とドラント伯爵の爵位の点で利害が一致したジュールダンとドラント伯爵が、ジュールダンの長女アンリエット（ファニー・ヴァレット）とドラント伯爵の息子トマ（ジリアン・ペトロフスキ）を結婚させようとする

るストーリー。アンリエットにはしがいない音楽教師のヴァレール（ゴンザーク・モンテユエル）という恋人がいたが、あの時代、親の決定に逆らうことなどできないのは当然だ。劇作家としてさまざまな人間ドラマを書いてきた若きモリエールは、そんな事態をみていかなるアイデアといかなる演出を？

フランスでも土農工商の身分制度が？

日本では徳川家康が征夷大将軍となった1603年から1867年の大政奉還まで徳川幕府が265年間も続いたが、近時の安倍・福田・麻生政権とは全く異なる長期政権が実現できたのは、第1に鎖国政策、第2に土農工商という厳格な身分制度のおかげ。4月18日放映のNHK大河ドラマ『龍馬伝』では、町人から武士に転身し今は勝海舟の屋敷に住み込んで働いている長次郎に対して武市半平太が「町人の方で・・・」というセリフを吐いたことに対して、長次郎が怒りを爆発させていた。土佐に定着していた上士・下士という身分制度に辟易していた武市半平太であれば、坂本龍馬のようにもっと自由な身分制度に憧れるのが当然なのに、長次郎の怒りはもっともだ。

他方、資本主義では金がすべてだから、18世紀にイギリスで起こった産業革命以降「資本家」が大きな力をもつようになったのは当然。『龍馬伝』に登場する岩崎弥太郎はさしずめその典型だ。本作を現代人の私たちの目でみれば、金持ちの商人ジュールダンにけっこううらやましい身分に思えるが、17世紀のフランスではそうではなかったようだ。つまり、太陽王ルイ14世が統治するあの時代のフランスでは、第1身分=カトリック聖職者、第2身分=貴族、第3身分=その他のフランス国民という身分制度が確立していたため、商人はいくら金持ちでも所詮第3身分にすぎなかったわけだ。

したがって、そんな第3身分のジュールダンが金にまかせて第2身分の侯爵夫人セリメーヌに言い寄っても、それは所詮ムリ。つまり、あの時代のフランスでも日本の土農工商や土佐の上士・下士制度と同じように厳格な身分制度が存在していたわけだ。そんな目でセリメーヌの気を引くため懸命に奮闘するジュールダンの姿をみていると、バカバカしいと思う反面少しは同情する気持ち湧いてくるのでは？

なるほど、悲劇と喜劇は背中合わせ！

若い時の苦労は買ってでもやるべき。そんな教訓は、中国でも日本でもそしてヨーロッパでも同じ？借金を払えず投獄されたモリエールだが、ジュールダンとの取引によって次女ルイゾン（メラニー・ドス・サントス）の教育係としてジュールダンの広大な屋敷に住み込んだモリエールには、エルミールとの運命的な出会いが待っていた。そして、その後のさまざまな劇的展開の中、モリエールはさまざまな波乱の「演出」を要請されることに。

使い捨て芸人たちのオンパレードとなっている日本のアホバカバラエティー番組はバカげたギャグの応酬だが、さすがにモリエールが丹精込めてつくった劇の笑いは人間味タップリで面白い。天才モーツァルトがかなりのヤンチャ坊主だったことを同世代に生きた音楽家サリエリの目で描いた傑作が『アマデウス』（84年）だったが、そこでの若き日のモーツァルトのヤンチャぶりは相当なものだった。そう考えると、若き日のモリエールがい

ろいろと無茶をしたのは当然だと納得できるが、自分の雇い主であるジュールダンの妻エルミールとの不倫はいかがなもの？さらにジュールダンの長女アンリエットとドラント伯爵の息子トマとの結婚を阻止するため、モリエールが書いた脚本(?)に沿って演じる、エルミールの一世代の大芝居もいかがなもの？

「人間万事塞翁が馬」という教訓は、張芸謀(チャン・イーモウ)監督の名作『活きる』(94年)やチェコスロバキアのブラハ生まれのイジー・メンツェル監督の『英国王 給仕人に乾杯!』(06年)などで明らかだが、「悲劇と喜劇は背中合わせ」という教訓は、モリエールをほとんど知らない私でも本作をみれば実によくわかる。ちなみに、本作のパンフレットにはモリエール作品についての解説がたくさん載っているから、興味ある人は是非それを参照されたい。もっとも、そんな知識がなくても本作を観れば、登場人物たちがかもし出す人間模様の本質をしっかりと感じとることができるはずだ。

シェイクスピアの悲劇は悲劇としてすばらしいが、なるほどモリエールの喜劇はこんなに面白い。少なくとも、それが本作を観れば理解できるはずだ。2時間の中で観客を笑いに誘いながら、「これぞモリエールの喜劇!」というエッセンスを見せてくれた本作に感謝。

2010(平成22)年4月20日記

子ども手当と鳩山由紀夫総理の辞任

1)09年の8.30総選挙で民主党が掲げたマニフェストの1つが月額2.6万円の子ども手当の支給。ところが、財政難の中高速道路の無料化と同じくその処理は迷走し、結局半額の1.3万円を6月1日から支給することになった。最大の問題点は、本当に子供のために使われるのか？だが、そのチェックは難しい。また、タイで養子縁組をしたと称して554人分の手当約8600万円を申請しようとした韓国人男性もいるから、自治体の担当者は大変だ。ちなみに、7人という子だくさんの橋下徹大阪府知事も「公務員の給料を削って子ども手当を発行するのなら良いが、赤字を作って配るのは国民の機嫌を取る政策だ」と政策手法について批判しながらも、やっぱり月額9.1万円、年間109万2

千円を受け取るらしい。来る7月11日に予定されている参議院選挙に向けてマニフェストに子ども手当をどう書き込むかの議論は二転三転。なお迷走をくり返しているから、その先行きは不安なままの支給開始だ。

2)そんな中、飛び込んできたのが鳩山由紀夫総理辞任のニュース。小沢一郎幹事長を道連れにしたところは立派だが、麻生太郎前首相以上に口の軽いお坊っちゃんだったことに多くの国民はあんぐり。今後の民主党の建て直しは？参議院選挙の結果は？国民の関心はそこに集まるが、支給が始まったばかりの子ども手当はさらに迷走しそうだ。もっとも、それだけの迷走で留まれば、日本国はまだまし？

2010年(平成22)年6月2日記